

寛永四文・踏潰手俯永瑕寶について

旭泉亭 加藤 大扶

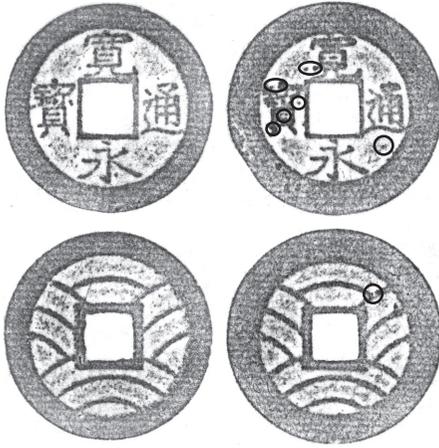
■はじめに

寛永銭には、四文俯永を祖型とする「潤縁・縮字」体で踏潰銭系統の密鑄銭が存在します。後述のとおり、古拓にも散見されますが存在僅少ゆえ、これまで殆ど認知されてきませんでした。

今回、ある程度の情報蓄積が出来ましたので、本稿で紹介したいと思います。なお、後掲の図2に奥羽地方の略図を掲載します。

さて、本銭は「寛永四文」踏潰手俯永瑕寶」と称させます。また、後述のとおり「非潤縁・縮字」体の一群も発見されています。

■本銭の特徴など



明和俯永

踏潰手俯永瑕寶

本銭は、上に並べた二つの墨拓を見比べていただくと分かる通り、四文俯永の銭文に一致しますが、潤縁で内径・銭文が小さくなっています（＝潤縁・縮字体）。そして、銭文や背波などに、特徴1～7の瑕を認めます。

特徴1…「寶」ウ冠第3画に鑄切れ（＝瑕寶）。

特徴2…「寶」尔末画の点が小さい。

特徴3…「寶」貝第3画の中央付近に鑄切れ。

特徴4…「寶」貝第6画の前足付根に鑄溜まりがあつて、太く見える。

特徴5…「寛」見第5画の打ち込み延長線上に島（＝鑄溜まり）がある。

特徴6…「通」字下方に鑄溜まり。

特徴7…右4波の後波との交点直上に僅かな鑄切れ。

加えて、概ね特徴8～12の傾向を認めます。

特徴8…銅色は、暗褐色～暗紫褐色。

特徴9…緑青を伴っている。

特徴10…面背には一定ないし不定方向の細かい鑄掛け。

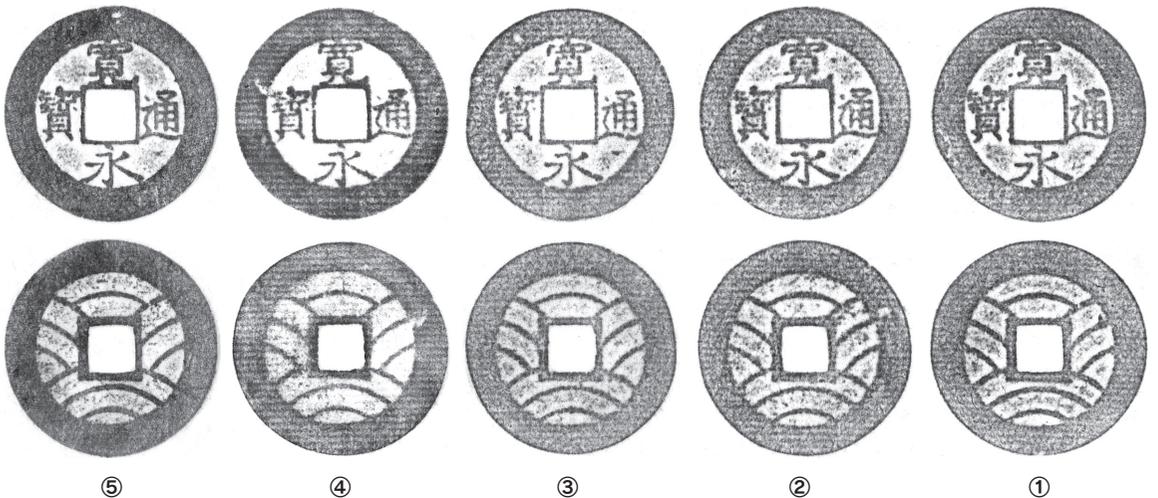


表1 寸法 (mm) 重量 (g) と銭容仕上げ一覧

番号	⑤	④	③	②	①	平均	
寸法重量	外径	29.2	29.0	28.6	28.8	28.9	28.9
	面内径	19.9	20.0	20.0	20.0	19.9	20.0
	背内径	20.5	20.5	20.4	20.5	20.4	20.5
	銭厚	1.0	1.3	1.1	1.2	1.1	1.1
	重量	4.6	5.6	4.8	5.0	4.8	5.0
銭容仕上げ	銅色	淡黄色	緑錆を伴う暗褐色～暗紫褐色				-
	面 鑑	一定方向			不定方向		
	背 鑑	一定方向			不定方向		
	郭内鑑	無(※但し綺麗に鑄抜しており何らかの仕上げ有と認む)					
	輪側鑑	不明瞭	横方向		斜・横方向	不明瞭	

特徴11…郭内に鑄痕は認められないが、綺麗に鑄抜けている。
特徴12…輪側には、横斜め方向の鑄痕。

■本銭の確認五孔について

踏潰手俯永瑕寶は、前頁下部に並べた墨拓①⑤のとおり、私の蔵品と知己の古泉家二人で計五孔の現物を確認しています。

①～⑤の寸法重量と銭容仕上げは、表1に整理するとおりです。

私が蔵する三孔(①～③)は、何れも雑銭の会(※古くは練馬雑銭の会)を主宰されていた暴々鶏こと工藤英司氏の旧蔵品です。この内③は、昭和五七(一九八二)年刊行『秋田貨幣研究会創立七周年記念錢譜』の七二頁で、「不知俯永潤縁」と称し、墨拓を掲載しています。ほか二孔は、岩手県南の古泉家から譲り受けたものと、自身が雑銭から選り出したものと聞いています。

次に、④は川崎の湧泉堂こと安達勇氏の蔵品ですが、かつて岩手県花巻にあった古銭店で求めた依緝四、〇〇枚余から選り出したそうです。

また、⑤は横浜の稲陽舎こと稲毛孝氏の蔵品ですが、インターネットオークションで入手されたとのこと。なお、⑤のみ淡黄色ですが、異銅色というよりは、保存過程の差で生じたものといった雰囲気です。このため、①～④も磨くなりすれば、同じような色合いの地金が見れるのかも知れません。

そして、①～⑤の面・背内径は、ほぼ同じです。従って、これら①～⑤は、「同一世代(※後掲の表6に示すとおり、祖型から鑄写された回数が同じ)」と判断出来ます。

■本銭は東日本で一四孔を確認

暴々鶏氏の先行調査に拠ると、踏潰手俯永瑕寶は、東日本で一四孔確認されています。そして、そのうち四孔は①～④です。

このほか、秋田県北で一孔、同県南で二孔所蔵する古泉家が居り、内県北の一孔と県南の一孔を实見された由。県南の残り一孔は、「もう一孔所蔵している」と本人から伺ったものの、実見出来なかったそうです。なお、兩人とも鬼籍に入られており、現在の所在は不明です。

そして、残りの七孔は「誰々が持っている」といった伝聞情報とのことでした。

なお、⑤に関しては、インターネットオークションでの入手経緯もあり、当該一四孔の内数なのか分かりません。

■本銭の古拓情報と踏潰銭への言及

踏潰手俯永瑕寶は、次頁のi～ivに示すとおり、幾つかの古拓でその存在を確認出来ます。

iは、『寛永錢講習録』という資料に掲載の墨拓です。本資料は、東洋鑄造貨幣研究所ホームページの解説(※同所は既に閉鎖されていますが、今でも一部を閲覧出来ます)に拠ると、大正一四(一九二五)年より花林塔こと三上香哉氏を講師として開催した、寛永通寶に関する研究会で作成されたものです。但し、『日本古貨幣変遷史』では、大正一三(一九二四)年初秋、田中啓文氏(錢幣館)の企画により花林塔氏を講師として催されたと説明しているほか、資料名を『講習會譜』と記述しています。なお、本資料内ではiを「仙台俯永様」と紹介しており、当時「仙台藩鑄銭(※母銭の墨拓を後掲します)」系統のものと認識していたことが判ります。